

質疑応答・討論（2日目） 加曽利E式土器中ごろ～後半の様相について

登壇者 小林謙一（コーディネーター）・大村裕・黒尾和久・塚本師也・大内千年・大網信良・加納実・
小澤政彦・稲村晃嗣

小林（コーディネーター）：

小林です。昨日から2日間にわたって熱い議論がされていますが、土器の細かい議論が続いておりまして、おなかいっぱいと言いますか、ちょっとオーバーフローしているところがございますけれども、特にこの討論まで残っておられるというのは相当マニアックな方だろうと。私も今、大学で授業で一応考古学をやっていますけども、最初春のうちは、教室がいっぱいになるくらいで、教室の大きさが足りないよ、みたいなことを事務に言ったりするんですけども、後期の今ぐらいは、ここにいらっしゃる方よりもずっと少ない、半分ぐらいの学生になってしまう、まあそういうものかなと思うんですけども。ひとつ、最後まで、せっかく残っていただいているのでよろしく願いいたします。

今日はですね、昨日の加曽利E式成立期と今日の加曽利E式最盛期から終末期と、編年対比というか、その辺りをちょっと話したいと思うんですけども、古いところ、真ん中辺り、最後の段階、それぞれについて、講師の皆様方に質問を踏まえながら、混ぜながら、お話のほうをまた聞いていきたいと思えます。最初に、前提と言いますか、ちょっと大村さんのほうからですね、補足で、黒尾さんの発表に対して少し確認したいことがあるということで、よろしくお願ひします。

大村：

昨日の黒尾さんの発表、私も学史にちょっと興味がありますので、興味深く拝聴して勉強になりました。一点だけですね、黒尾さんのご指摘で、「うーんどうなのかな」という疑問がありましたので、昨日帰ってからちょっと施紋実験なんかをして、関係論文も漁って、検討してみました。もし何か間違いがあったり、疑問があったりしたらどんどん私に言ってください。訂正するのは全然やぶさかじゃないです。

それでは本題に入ります。私の疑問は、図譜の81の1と2、および83の1の地紋は、黒尾さんがおっしゃるように、果たして「撚糸紋」なのか、ということなんです。これらの施紋原体はなんなのかと思って『日本先史土器図譜』を確認してみると、山内先生は81-1だけ「縦行する縄紋」が施されていると書いています。他の土器の原体は記載がありません。それでさっき黒尾さんに控室で個人的に「撚糸紋とした根拠は何なのか」とお伺いしたら、〈写真を拡大してみたところそういう風に見えた〉とおっしゃいました。私も虫メガネで見たんですけども、私にはよくわかりません。縦行縄紋について山内先生はこんなことを書いています（スライド省略『日本先史土器縄紋』44頁を複写掲載）。これは縄紋の施紋、回転方向のことについて書いているわけです。斜位っていうのは、斜めに施紋するということですね。「縄を斜に置いて、条が縦の方向に続く様に、押捺する位置を移しつつ作ったものである」とあります。（以下、8行削除）（註1）重要なところは次のくです。斜方向に施紋すると縄紋は、

「時には撚糸の列と似て見えるが、節の傾き具合が著しくない。斜行する縄紋と同じ様に、条と直角に近い形を示して居る」。

と記載されています。条の方向と、節がこう直角に、ほぼ直角なんです。撚糸紋のLならば左傾、

Rならば右傾なんですけれども、こういう風にほぼ直角になるものは、縦行縄紋であると。81-2は条がものすごく密接していて、撚糸紋か縄紋か区別つきませんが、81-1を確認してみますと（スライド2の81-1参照）、これは一見撚糸紋に見えますけども、山内先生ご指摘の通り恐らく縦行縄紋です。デジタル機器に詳しい方がおられましたら精密機器で写真を拡張して、節をぜひ確認してみてください。なおこの土器の出土遺跡については疑問があります。小澤さんと私どもが、中峠6次1住型深鉢の研究をしたときに、このように口辺部に集合沈線があるのは、茨城から千葉北部中心に分布しているんですね。ほとんど東京とか神奈川には見られなかったんです。ちなみにこの土器は現在の川崎市出土です。「おかしいな、なんでこんなのが川崎に出るんだろう」ってことで、ちょっと疑問に思ったことがあります。もしこれが縄紋であれば、東関東のほうの加曾利E式土器の可能性もあるんじゃないかと想像しています。なによりも私が「おやっ」と思ったのは、83-1ですね。これ千葉県市川市姥山貝塚出土です（スライド2の83-1参照）。ご案内のように、下総地域ではですね、加曾利E式の「最も古い部分」でも、縄紋施紋が多いんです。縄紋が縦行します。私は千葉県松戸市所在の中峠貝塚の発掘報告書を、三十数年間手がけていますけれども、加曾利E1式で撚糸紋がはっきり確認できる大きな個体というのは、中峠3次調査の2号住と、4次調査の1号住出土のものだけです。小破片ならばもっとあるかもしれませんが、それぐらい復元個体としては少ないわけですね。姥山貝塚出土土器は杉原荘介博士が少年の頃に発掘して、今東博に寄贈されているはずですから、もし機会があったらぜひこれ確認したいと思います。この土器も、この辺（スライド2の83-1：口辺直下の「V」字状文周辺をポインターで指示）をよく見ますと、条に対して節が直角に近いんですね。これはだから、撚糸紋ではなくて縄紋である可能性が高い。まあ私は実物を見たことがないので、はっきりは言えません。

もう一つの可能性として、山内先生が撚糸紋を、「縦行する縄紋」として表現した場合を考えてみました。ところが、スライドに示した続縄紋土器（スライド3：室蘭市本輪西貝塚出土。『ドルメン』2巻2号、1933年所載）の体部について山内先生はこう書いています。『日本先史土器図譜』が刊行開始される6年前です。

「縄を押捺したものであるが、特殊の操作を用ひて居るため圧痕に於ける条は斜行せず、回転の方向に沿うて居るように見える」。

これは縦行する縄紋です。すでにもう縦行縄紋が撚糸紋のように施されていることを見抜いていたんですね。で、この「特殊な操作」っていうのは、要するにこれ、節が不鮮明なのでよくわかんないけれども、左方向なり右方向なりから、斜方向に縄紋を施したので、「特殊な操作」と表現したのだと推定されます。普通はほぼ横方向あるいは縦方向に縄を転がしますので。ですから、撚糸紋を「縦行する縄紋」と表現するわけではない、という風に私は思っております。次に撚糸紋と縄紋の違いに、いつ気が付いたのかっていうことも調べてみました。昨日帰ってから一生懸命勉強したので、寝るのが遅くなっちゃったんですけれども。『日本先史土器の縄紋』には、「昭和6年偶然の機会から、回転押捺によって縄が斜行縄紋をつくり、軸に縄を巻絡したものが撚糸紋を作るということを知った、とあります（スライド4参照）。ということで、縄紋の原体と一緒に、撚糸紋の原体もこの時点で知っていたわけですから、まず山内先生が、撚糸紋と縦行する縄紋を間違えることもないというのが私の考えなんです。

小林：

はい、ありがとうございました。では黒尾さん。

黒尾：

ご指摘ありがとうございます。本当に迂闊なことでした。『図譜』に記された縦行縄文が撚糸文を当然に含む意味で使われているんだろうなと思って、武蔵でやっていた調査経験則のもとに、自分なりに縄文原体について判断したのが、図譜81の土器たちなんですね。昨日は、Y（撚糸文）の土器として、Y+r（撚糸文+隆起線）の土器としてそれを紹介したんですけども、図譜の82のほうの土器ですね、下総の83ですか。83の土器については、ご指摘のように、縦行する縄文の可能性が高いなど、今反省しております。大村さんの分析にもあったんですけども、81の図に関しては、これがいわゆる撚糸文ではなくて縦行縄文であるということですけども、今の段階では私としては撚糸文の蓋然性が高いということで、判断を保留したいなと思っています。仮にですね、これが大村さんのご指摘のように縦行する縄文の地文であったとしても、基本的に昨日の私の発表の武蔵の土器の、最も古い段階の古い土器については、撚糸文地文で大部分の施文が始まって、それに隆線が貼り付くという。そしてそれが撚糸文から斜行縄文に隆線が貼りつくというのにも変わっていく三段階があるということは、間違いないことであります。もし本物（図譜の資料）を見ることができて、撚糸文ではないということであれば、今回の発表のその部分に関して撤回しますけれども、最終判断はしないでほしいと思います。最初は縦行縄文だけ、スライドに文字を入れていたんですけど、シンポジウムの直前、ホテルで、話を早くわかりやすくするために撚糸文と入れてしまえという、ちょっと拙速なところがあったことを大村さんにしっかりご指摘していただいたという風に反省しております。ですから、この討論の記録は記録集で残るとしますので、そのときにしっかりとその辺のところを修正させていただくようにします。どうもありがとうございます。

大村：

もう1件だけ質問です。どうなのかな、と見ているんですけども、これ（スライド省略 『日本先史土器の縄紋』41頁の附表I 掲示）は、山内先生の学位論文の附表なんですけども、関東地方の縄紋の特徴をまとめたものです。ここに「L⁵」っていうのがあります。関東地方の中期の前半ですね。で、「L⁵」っていうのはどういうことかという、一段の縄に戻したときにLになるもの、したがってRLですね。上付きの「5」っていうのは、斜位圧痕、斜めに回転するものです。関東地方の中期の前半は、「L⁵」、すなわちRLを左から斜方向に施文したものが「L⁵」です。この「L⁵」の縄紋から、撚糸紋に劇的に変化した要因みたいなものが、もしわかれば教えていただきたいと思います。

黒尾：

要因についてはちょっとよくわかりませんが、まさにこれは縦行の縄文だと思いますけれども、勝坂の最終末に撚糸文の地文の土器が増えてきます。それは西多摩地区では散見される程度ですけど、どうも北武蔵のほうに印象としては多く、それが加曽利Eにつながっていくのではないかなと思っています。それはなぜなのかって言われるとちょっとよくわかりませんが、現象としてそれがあって、Lの撚糸の地文が我々の言っている武蔵野台地型の加曽利Eには地文として普遍的に採用されている。これが南武蔵、多摩地区の状況ではないかなと思っています。なぜそうなるのかって言われると少しわかりませんが、

小林：

じゃあ、よろしいでしょうか。予稿集の5ページですね。5ページのところをご覧ください。加曽利貝塚博物館のほうで用意していただいた編年対応なんですけども。この話をさせてもらいます。まずは前半

から。昨日の1日目で言うと、塚本さんのほうで、いったん北関東からということで、整理してもらったんですけれども。塚本さんの加曽利E Iの古い段階っていうのが、そのまま置けるかどうかは別として、我々がいうところの9c10a段階くらいに来るのかなと。で、E Iの真ん中くらいが、10bとかぐらいで、新しい段階が10cから11aくらいかなって聞いていたんですけれども。この辺り何か、塚本さん、コメントもらえますか。

塚本：

今の、小林謙一さんのご指摘で間違いございません。昨日はつきりとは言いませんでした、一応、真ん中にある埼玉の、谷井さんの1982年におおよそ従う形で今まで研究を続けてきたということになります。

小林：

はい、ありがとうございます。ではその中で出てきたんですけれども、大村さんからお話伺いました、中峠諸類型ですね。それらを、ちょっと含めている状態だったので、塚本さんの発表では、山内型式の加曽利E Iよりも、古い段階のものを含めていた、っておっしゃっていたかと考えたんですけれども、そういった理解でよろしいでしょうか。

塚本：

はい。

小林：

そうしますと、中峠諸類型っていうのは、いわば中間型式に相当する土器群なので、この辺りに勝坂から加曽利Eに変わってくる中で、局所的に点在している諸類型であるという風に整理されているわけです。そのまま、置けるかどうか別で聞いてみるっていうことで、大村さんとか大内さんにお聞きしたいんですけれども。中峠諸類型は、我々のいうところの9cに収まると理解していいか、9cから10aにかけて存在すると理解していいでしょうか、または9bくらいからあると理解するべきでしょうか。その辺り、もしご提示いただければ。もちろんそういったことは、新地平編年と対比する形ではまだできない、っていうこともお答えとしてあると思うんですけれども。お聞かせいただければと思ったんですが、いかがでしょうか。

大村：

中峠式の研究やったのは1996年から1998年くらいの間なので、もう20何年経ってますので。それから昨日お話したように、大木や勝坂の研究、今は阿玉台の研究に行っているんで、はっきりしたことまで現状の資料からは言えないんですけれども。新地平編年のいうところの、9cから10aにかかっていると僕は思うんです。

小林：

はい、わかりました。大内さんもそういった考えですか。

大内：

はい。

小林：

ありがとうございます。ではそれから黒尾さんのほうから。

黒尾：

おそらく新地平編年9b期からいわゆる中峠の類型のものが伴うのではないかと、中山真治さんもその

ように言っています。中峠の諸類型が多摩地域にぼんと入ってきた際に土器群と伴出関係というか共出関係にあるのかというのを、もう一度我々のほうでも整理しなおす必要があるなと思いました。それで、9b期から10a期にかけて、中峠の諸類型も存在する中で、武蔵野台地型の加曽利E式が成立していく、その辺の時間軸についてもう少し整理したいなっていう風に考えますけれども。

小林：

またこれからちゃんと整理したうえで議論できれば。これが黒尾さん、前半のほうのお話ですね。前半のほうのまとめっていうことですが、これ編年対比ですね。先ほど加納さんのほうから、新地平編年ですり合わせていくのが、一つの方策としていいんじゃないですか、みたいなことをお言葉いただきまして、ちょっとびっくりしているんですけども、新地平でいくっていうのはちょっと置いといてですね。編年を対比させていくということが重要であり、そうしないと、食い違いばかりになってしまいますから。中でも、ローマ数字編年とアラビア数字編年のところに関しまして、昨日の大村さんの発表や、黒尾さんもお話しされてきたわけですが、ここ（図2小林スライド（予稿集5ページ「加曽利E式土器の細分・表記の対応」改変）の上2段のE IとE IIとE III、3段目のE1とE2とE3の境の位置）を見て言っている。ちょっとこことか気になるんですよ。ローマ数字編年のE IからE IIと、算用数字編年のE 2からE 3がけっこうずれてる形なんですけれども。これなぜかっていうと、おそらく新地平11aと11c1とかのところに、11bとかが同時に入る（補足：予稿集5ページ「加曽利E式土器の細分基準の違い」の新地平編年の段に11bがなく11aか11cに含ませている）形になってるんですけども、おそらくこれは、私が思うには文様帯の口縁・頸部・胴部の三段編成から口縁・胴部の二段編成へという、文様帯構成の変化を追求しちゃってるから、加曽利E 1に新地平11aの段階が入っていて、11bになるとまた三段構成がだんだんなくなるから、そこから加曽利E 2式、そういう理解じゃないかなと思うんです。これって、文様帯構成の割付とかの問題ですね、大きな問題になっているのは。割付のところかというと、割付じゃない磨消縄紋だ、ごめんなさい。磨消縄紋で言ったら、算用数字のE 2からE 3式のところで切っているところ、ここのところは文様帯構成で切っているから、けっこうそれがずれているということになっているんじゃないかなと思うんですけども。その辺、どうなんですか。

黒尾：

文様帯の有無や消長に着目する加曽利E式編年では、二帯（口縁部+胴部）から三帯（口縁部+頸部無文+胴部）になって二帯（口縁部+胴部）への変化が時期細分の区切りになるわけです。他方で文様要素の変遷を重視する、昨日館さんの体部の割り付けの話がありましたけど、胴部文様に沈線が統一採用される段階から加曽利E 2式なんだと私は考えます。それ以前が「最も古い段階」（加曽利E 1式）で、胴部文様には、沈線もあるし、斜行縄文だけのものもあるし、隆線もあると説明されたっていう。そういう段階です。たまたま武蔵では撚糸文地紋と隆線の施文が卓越してそこからきれいに沈線に変わるので、そこから私たちは加曽利E 2式、そこから11期と分けてきたわけです。ですから、対比ができるのであれば、多少ローマ数字と算用数字の編年区分線がずれていてもかまわないとは思いますが。ただ問題は、昨日の話でいくと、磨消縄文の開始をもって加曽利E 3式ないし加曽利E II式とするのか、そうではなくて、文様帯構成が二帯に戻るところで加曽利E 3式ないし加曽利E II式にするのか、けっこうここは大きい問題だと思うんですよ。私としては体部の文様構成で区分するという山内さんの方針に従うならば、磨消縄文の成立で分けるべきだと考えます。ただ文様帯の有無、文様要素のあり方で分けるという違いがあっ

でも、それであればここで分けますよと、それが相互にちゃんと対比ができればいいとは思いますが。ですから「編年対照表」みたいなものを作って少しここが違うんだというのを詰めながら、調整していくっていうのをやってきたわけです。加納さんの話は、ローマ数字のEⅡ式、アラビア数字のE3式などと言いながらの議論は煩雑、しかも文様帯構成なのか、文様要素なのかで、さらに境目も変わってきますから、その面倒を回避するためにその符号として「新地平編年」の時期呼称を使ったほうが共通言語になると言ってくれたと思いましたがけれども。

小林：

まあちょっと、さっきのもの（予稿集5ページ掲載の「加曽利E式土器の細分基準の違い」「加曽利E式土器の細分・表記の対応」）を作り直したほうが私もいいと思うんですけども。今のお話で私も思ったんですけども、このローマ数字のEⅠとEⅡ、あと算用数字のE2とE3の境ですね。磨消縄文の成立で分ければ、ここ、新地平の11c期と12a期の境ですから、この線がここ（予稿集5ページ掲載の「加曽利E式土器の細分基準の違い」では左から4つめの土器と5つめの土器の間）に来ていると。その下の図（予稿集5ページ掲載の「加曽利E式土器の細分・表記の対応」）ではここ（ローマ数字では11a期と11b期の間、算用（アラビア）数字編年では11c2期と12a期の間）ですよ。そこは、どちらをとるかっていうところが問題なんですけれども、前半段階のほうで先ほどだいたい塚本さんのほうからだと、ある程度は振り分けられると。今日千葉の館さんがいらっしゃらないのがちょっと残念なんですけれども、前半段階の変化、南西関東では黒尾さんのお考えのように、胴部の文様の変遷でたどっていけると。あとそれと、口縁の文様内の区画とかっていうのも、ある程度変わっていくと理解していますけれども、東関東と西関東の対比っていうのが大事なことです。やっぱり東関東はかなり違っているんじゃないかなっていう。そうすると、せっかく加納さんにある程度は認めてもらった新地平編年も、ある程度覆るような形で。あくまでも新地平編年は、南西関東のもんですから、直接は東関東に持って行けないっていうことが。けっこう利用可能かどうかを聞く人がいるんですけども、それは黒尾さんどう思いますか。

黒尾：

たしかに武蔵や多摩を中心に胴部の文様要素に着目して加曽利E式期の時間軸を作っていくと、たまたま山内さんの先行研究と照らした際に「古い部分」の細分に都合がよい地域が武蔵となっていると、私は思います。例えば頸部無文帯を持つ土器は10a期の一番古い段階にもあって、それに沈線の文様がついたりするんですね。そういうのってたぶん加曽利E式の成立の過程で、元となっている類型が違っているのではないのでしょうか。そういったものって各地域にお互いに混ざり合いながら存在しているはずなので、そういう土器群をてがかりにしながら、それこそ良好な一括資料というキーワードが出てきてしまうかもしれないんですけど、そういう土器が、この地域の中心となる加曽利E式の中であってどの時期に出てくるのかみたいなものを確認していくことが必要ですね。頸部無文帯の有無についても、武蔵や相模と違って、東関東や北関東では頸部無文帯の土器が主流にはならないかもしれないが、全くないと言っているわけではない。頸部無文帯の土器が東関東や北関東のどの土器に伴うかを確認することによって、地域間の編年交差ができるように整えていくことをこれからやっていけばいいんじゃないかなと思いますけれども。それにはまず、各地域で段階設定、きちっとした土器編年を整えて、たとえば南武蔵において加曽利E式の「最も古い部分」は3段階に分かれると考えておりますが、それとの併行関係がどうなのかを確かめていくことをやっていくのがいいと思いますね。加納さんの今日の加曽利EⅢ・Ⅳ式を中心にしたお話は、我々の

12c 期から13a・b 期についての対応関係を確認しようという、そんな話だったのではないかなと思います。

小林：

12c、13a、13b の辺りは、加納さんとの対比で、あとでまた確認したいと思いますけれども。わかりました。もちろん各地域で土器の編年、研究を進めていって、対比するっていう方向で。最後に一つ、今回はあんまり大きなテーマとして入れてないんですけども、南西関東の、武蔵野台地型加曽利Eの成立ですね。前からずっと議論があったと思うんですけども、南西関東で、台耕地型くらいはあるけれども、中峠の諸類型ではあんまり見られなくなってくると思いますけれども、代わりに狐塚とか、南西関東の勝坂の諸類型が、大型把手付きの多喜窪タイプを援用したものが展開していたり、小型の円筒系とかが、中部関東で展開しているものが残っていたりして、そういった動きの中から武蔵野台地型加曽利Eが出てくるというように思うんですけども、その辺り、どういう立場ですか。

黒尾：

なかなか厳しいですね。「武蔵野台地型加曽利E式」をどう定義するかっていうことですね。新地平のシンポジウム2004年で9c 期の問題をとりあげたときに、それまで10a 期というイメージを持っていた土器群の中から一部のものを9c 期に繰り上げた経緯があって、9c 期には、基本的に「武蔵野台地型加曽利E式」は成立していないと整理しました。ではその成立するメルクマールは何かというと、まず撚糸文の地文施文が先行する。で、口縁部文様帯の上端と下端を隆起帯できっちり区画し、その間をS字とか、クランクに2本一組の隆起帯を貼り付けていく。これがメルクマールなんじゃないかという風に思っています。台耕地型の深鉢、例えば調布市原山遺跡にも出土していますが、地文は撚糸文だったり斜行縄文だったりしますが、口縁部にS字状の隆起帯が貼り付くんですけど、口縁部の上端は開放されており隆起帯で画されていない。そうした土器群は、「武蔵野台地型加曽利E式」の成立より古く、勝坂式と伴出することが多いという、そういう経験則があります。新地平2016年シンポジウムでしたっけ、加曽利E式の成立について、武蔵でも東寄りの荒川流域の資料も加えて、再度考えてみようと思いましたが、あのときも結論は出なかったんですが、今後も加曽利E式の成立について、考えていきたいなと思っています。ただ加曽利E式の成立には、時間的傾斜があるという予察もありますので、南武蔵・相模から加曽利E式の成立を考えるには、9c 期を段階として準備しておかなければならないんだろうなっていう風に考えています。

小林：

はい、わかりました。その辺りは、荒川右岸とか地域毎に考えてもらいたいっていう、検討しなきゃいけないっていう課題にします。

それでは前半期の話は以上にして、真ん中辺りの、アラビア数字のE 2式段階。この辺りの話をしたいと思うんですけども、こちらは、今日午前中の発表ですね、大内さん、大網さんにいただきました。それについて確認をします。質問が来てますので、ちょっと読み上げてみます。まず、大網さんに対して、連弧文土器はどのように生まれたのかっていう質問です。それから、大網さんと大内さん両方に来たんですけども、両氏の御講演において、加曽利E式のある時期に連弧文土器と曾利Ⅲ式（系）の土器群が、千葉県下で共存するとのお話がありましたが、千葉県内の連弧文と曾利系の土器群が出現する時期と衰退していく時期は揃っていたりするのかな。また、両者の型式（土器群）には文化的な関係が、両者に関係があるのかどうか、っていう質問です。お二人それぞれ、お願いします。どちらからでも。

大網：

まず連弧文土器がどのように出現したかということですが、今回あまり詳しくお話しできませんでしたが、研究史としては大きく2つに分けられます。加曽利E式と曾利式の折衷から生まれたとする、主文様が弧線という結構シンプルな文様ですから、どのような土器文様からでも想定しようという意味で、そういった内的な折衷に連弧文土器の祖型を求める考え方が一つ。もう一つは、私はこちらに注目して検討したことがあります。東海地方や近畿地方の土器群との関係性を想定するものです。連弧文土器は、今日お示した山内先生の図版にもあるとおり、口縁部にも胴部にも主文様である弧線文を施すというルールが研究当初に認識されているわけですね。こういった点を反映すると、加曽利E式や曾利式の系譜で弧線文が生じるとしても、口縁部にも胴部にも同じ文様を繰り返すという施文原則がそもそも内的な折衷からは生じえないと私は考えています。それは先学の方々も同様に気に懸けられている点で、そこでもう一つの祖型の地として、東海地方や、関西、瀬戸内地方の里木式や船元式、あるいは中富式など、そういった土器群と連弧文土器が関連付けられるのではないかとということで、大きく2つの研究史的な考え方がありました。そこで私自身も関東地方から東海地方にかけての土器群を検討したところ、もちろんその間に連弧文土器と東海系の土器群が行き来している証拠がたくさんあるわけではないのですが、少なくとも多少の土器群の往来を反映している事例があり、東海地方の土器群が中間地域を経由しながら関東地方の南西部にたどり着くことはあり得るだろうという結論に至りました。ただ、もちろんそれだけでなく、地理的にそういったいろいろな型式が接触するような関東地方南西部で、ある種オリジナリティもありつつ、他地域の土器群からの要素も取り入れつつ、結果として多系統的な土器群として連弧文土器が発生してきたのではないかと私は考えていますし、また戸田哲也さんも最終的にそういった形でまとめられているかと思えます。次に連弧文土器の出現・衰退と、曾利式の出現・衰退に関する時間的な問題ですが、連弧文土器については、今日お話ししたように、加曽利E式のなかでもE2b式期からE3b式期、新地平編年で言えば11b期から12b期という存続期間を考えています。衰退に際しては12c期の吉井城山類のような土器群に系譜として連なっていく可能性はありますが、少なくとも発生した時期は11b期以降ということになります。ですので曾利式では曾利Ⅱ式、その中でも曾利Ⅱa式期以降ということになります。

大内：

難しい問題なんですけども、曾利式的な情報っていうのは、房総には、ぽつぽつこころ来てると思うんですね。古手の時期、加曽利E2式よりも前の時期にもぽつぽつ来てて、でも結局断片的に来てただけで、それが定着して、房総で変化していくっていうことはないようです。なんかこう横から情報が来て、それをまねっこして作っているみたいな感じです。連弧文が入ってきて定着するのと、曾利式が入ってきて盛行するものっていうのは、タイミング的にはちょっとずれていても全然おかしくないと思えますし、多分まったく違う情報として入っているんじゃないかと思えます。それはまた、私が曾利式系の斜行文、重弧文って言ってまとめたものでも、多分それが一発でまとまって来るっていうのではないのではないかと。それぞれの土器の細かい類型や要素のようなものが、まとめて来るっていうよりは個々に入ってきていて、その入ってくるタイミングとかそういう点は、連弧文・曾利式系っていうような大枠ではなくて、もっとこう複雑な形でしか捉えられないんじゃないかなっていう風に思います。ただ、房総において曾利式系土器と連弧文系土器が盛行する時期は、やはり12b期ですね。まあ12a期、12b期っていうのが、房総においてちょっとうまく私には捉えられていないんですけど、12期っていう加曽利E式の磨消縄文の成立後に、

曾利式系と、連弧文系の磨消縄文という加曽利E 3式と同じ共通性をもった土器が非常に盛行するっていうのはまあ間違いない、というような感じですか。すみません、あいまいになって。

小林：

いえいえ。

大内：

それであると、文化的なものっていうことについても、あくまでも私は房総の曾利式系土器っていうのは、曾利式の土器情報の一部を受け入れただけで、全般的な曾利式文化、例えば曾利式の土器文化圏の中での盛行とか、そういった捉え方ができるかって言われると、あんまりそこまでのものは来ないんじゃないかなっていうことです。

小林：

そういった意味で言うと、大網さんが発表の中で、東京湾岸経由、あそこでワンクッション挟むっていう、あそこで曾利系とか連弧文とかも、変容したものが東関東に来たっていうお話だったと思うんですね。まあそうであれば、土器群として、ある程度影響力を持っていたかなっていう、東京湾西岸域と連動してるっていう見方もできなくはないと思いますが、その辺りどうでしょうか。

大網：

やはり今回の検討を踏まえると、連弧文土器でいえば東京湾沿岸地域が一つのエリアとして、土器に斉一性や定型化を促していくような素地があったのではないかと考えています。また曾利式の斜行文系土器についても、かなりローカルナイズドされたうえで、それらが一定の規格性をもって広範囲に分布する現象が見られます。今回大内さんがご紹介された曾利式系土器は、曾利式の中心地域では誰も作ったり使ったりしていないのですが、そのような変容した土器がこちらで作られて、そこが情報発信源のような形で、例えば関東地方の南西部だったり、東北地方だったり広範囲に分布しているような印象を持っています。これがどういった文化現象なのか、いまのところ相応しい言葉を用意できていませんで、今日も地理的なイメージを示しただけで終わっていますけれども、その辺は今後研究課題にしていけたらなと思います。

小林：

今言った「こちら」っていうのはどこですか。「そこが情報発信源」っていうそこはどこですか。連弧文が変容したり、あと特に湾岸系の曾利とか（南関東の地図上で）真ん中で丸くしていたところですね。それがそのあと、いろんなところで影響していったってことですか。「そこ」って、どこのことでしょうか。

大内：

湾岸っていうのはエリアとして、可能性はあるんじゃないですか。そういった、本来の本拠地からずれてきているところで、またもう一方で曾利式の変容したものがあって、情報交換しながら変わっていくみたいなモデルは、ある程度、考えられるかもしれません。具体的にどこが関連しているかっていうのは、今後の話だと思いますけれども。連弧文系土器に磨消がきっちり入ってくるっていうような土器の変わり方っていうのは、加曽利E式と共通しているような気がしますし、曾利式系土器と連弧文系土器の器形の面とかそういった共通性も今後、よりきちんと見ていくべきかなとは思っています。

小林：

ありがとうございます。もう少しだけ、私から質問というか聞きたいんですけども、曾利系と連弧文なんですけども、型式としてどうなのかっていうことを聞きたいんですね。特に連弧文のほうは、型式として設定していくべきなのかどうかというところのお考えを聞きたい。それから、曾利系なんですけども、例えば類型みたいな形でいくつか、要は大内さんの重弧文系とか斜行文系っていうような形で、文様を区分して分けていきますか。それは類型に分かれるか。そうでもないような気もするんですが。ごちゃごちゃしているところもある。特に古いのが残っている、これ非常に興味深いことなんですけど、そういうのってどのような性質なんですか。それを聞きたいと思います。

大網：

一点ちょっと逆に質問させていただきたいのですが、小林さんがイメージされる型式の定義ってどういった内容でしょうか。

小林：

はい、ありがとうございます。土器型式っていうことにはさまざま定義があると思うんですけども、基本的には山内先生のあれですから、時間的空間的範囲であることが一つ。今、我々の段階としてはもう一つ、系統性みたいなのも出てくる、系統型式として捉える形になると。（連弧文土器の場合は）時間空間が独立したものではないと思いますけれども。

大網：

文様系統としての独自性という意味では、連弧文土器は型式と呼んでもよいのではないかと思います。これについては、山内先生も「別の型式に属する」と指摘されていますし、これまで「類型」と呼ばれることもありましたが、定義によっては連弧文土器を型式とすることに異論はございません。

小林：

そういうお考えであれば設定するべきじゃないですか。

大網：

型式設定の手続きについて教えていただきたいです。

小林：

それは誰かが設定する。時間的空間的なつながりと、今おっしゃった系統性も明らかにされているわけですから。空間とかもやってるわけですから、要件としてはそろってきてるんじゃないか。もちろん、大村さんも前に一回ご指摘されていると思うんですけども、他にも型式要件を何にとるかっていうのが重要なことだと思うので、私が言っていることだけがすべてではないですけども。

大網：

その点については要件をもう少し勉強し、改めて検討したいと思います。

小林：

わかりました。大内さんいかがですか。

大内：

房総の曾利式系土器に関しては、私は型式扱いすることはできないんじゃないかと思います。本来の曾利式土器が、曾利式っていうものがあるとすればっていうことなんですけど、曾利式っていう型式そのものがダイレクトに房総に来ているわけではないですし、そもそもその曾利式土器の持っている要素だけがバラ

バラに来ているのかなという印象を持っています。ですので、あくまでも客体的な存在としての土器群つというようにあって、自立的に、この地域で、少なくともこの房総において、自立的に消長していく土器ではないという風に考えています。これはどういう風に扱うかっていうような感じになりますよね。

小林：

もう一個だけ大内さんにお聞きしたいんですけども、私がすごい面白いと思ったのが、12a・12bくらいに変形した曾利が湾岸地域に展開しているんですよ。特に千葉では、古いタイプ、要するに曾利のⅡ式の情報が保持するっていうお話があって、それが非常に面白いと思うんですね。曾利Ⅱ式の古いほう、これ（予稿集の大内第1図）で言えば新地平11a期とかそれくらいの段階のものが、要素が残っている。それは、古い要素が残っているんですけども、ただ、それはどの集団が保持していたんですかね。その段階（12a・12b期）でも、西関東ではそういったもの（曾利Ⅱ式の古手の要素を示すような土器）はあまりないじゃないですか。だけど東関東では残っていた。だけど、その東関東では古いときに少しは来るけれども、あまり主体として展開していないですよ。曾利系の土器が。なのになぜ古い情報が残るのか。

大内：

講演の最後のほうに、楡原さんの最近の成果を用いて若干触れたつもりですが、房総の隣接地域、これも具体的にどこなのかは示せないですけども、東京湾の向こう側くらいでは、11c期の段階である程度崩れは始まっているんですけども、一方では口縁部に加飾があって、古い要素を残しているようなものも、あまり様相を変えずに、12a期くらいまで残ってくるんじゃないかなっていう感じがしてんですけども。そういった曾利式の本場と房総の間で、ワンクッションおいているような地域で、多少古いものが残っているっていう状況が、情報の拡散とともに一緒くたに来ているんじゃないかなっていう感じがします。房総には、加曽利E2式の時期に曾利式系がぽつぽつ来るっていうのはあるんですけども、それを基盤とした曾利式系の情報が房総で保持され続けるっていうよりは、他の地域の情報が次々と横から展開してきているんじゃないかなっていうように想像しているところです。

小林：

最後に塚本さん、今話を聞いた連弧文系とか変容した曾利系っていうのは、北関東ではどのくらい見られるのでしょうか。

塚本：

連弧文は非常に少ないです、数が。特に那珂川流域までいくと少ないです。ただ、曾利系に関しては相当量出ます。多分千葉のほうのとまたちょっと違うとは思いますが、私が以前に調査した浄法寺遺跡というところで、加曽利Eのローマ数字のⅢくらいの段階だと思うんですけども、破片数えたら曾利のほうが多かったなんてこともありますので、在地のものとしてある程度存在したということは曾利については言えると思います。段階がたぶん千葉よりちょっと遅れるんじゃないかなっていう、今日のお話聞いて考えました。あとはそれをどう捉えるかっていうのは、栃木のほうの在地の中で変遷を捉える、独自に変遷しているかどうかっていうのを確認したうえで考えていきたいと思います。茨城はまたちょっと状況が違うようです。

小林：

わかりました。

じゃあ後半のほうに移りたいと思います。まず加納さんにですね、質問があるので。今日説明した縄文土器、加曽利E式土器の型式は縄文時代のいつごろで、今から何年前でしょうかという。加納さん、ちょっとあったので。それだけまず。

加納：

年代については、詳細な本を今日は持ってきていないのですが、概ね4,500～5,000年前くらいの数字をイメージしています。

小林：

はい、わかりました。じゃあもう一人、加納さんへの質問ですね。先ほどちょっと私からも出たんですけども、新地平編年を基軸にしてやっていくのも一つの案だとお考えですね、非常に興味深いと思うんですけども、加納さんの編年、または埼玉編年と、新地平編年との対応関係で、懇切に説明されていたけれど、両者では変化の画期となる段階が異なるのではないかと、ですかね。新地平とは12と13期の間で画期があると。以上の質問、どうですか。

加納：

予稿集の94ページをご覧ください。大内さんがかつてまとめた表の中で、埼玉編年と私の編年がすぐ隣り合わせになって、非常にわかりやすくなっているんですけども、埼玉編年でいうXⅢが私のEⅢ古、XⅣがEⅢ新・EⅣということです。先ほど私の港北ニュータウンの編年に合わせるというような話の中で、このXⅢとEⅢというのは確定だろうと思っています。その後の画期という意味で、予稿集のほうに書いてあるんですけども、EⅢ新という段階について、横浜市加賀原遺跡報告書の中で石井寛さんが、これを学史的に見てもEⅣとすることもできるんだと、流れの中でどこに画期を見出すっていうのは非常に連続的なので厳しい、というように書いてあります。私の発表で、横位連携弧線文土器のそれぞれの弧線文が上のほうでちょっと尖って口縁にくっついてくるですとか、くっついてこないですとか、また意匠充填系土器では、主文様の周囲の無文部が拡大して主文様が独立しつつあるのか否かというようなところで、私は画期は見出しております。その画期に対応して、新地平の例えば12cと13aの間で、どういう画期を見出していくのかという興味があります。例えば私の示した、意匠充填系土器については、多摩方面ではあまり良好な資料がないのですが、新地平のほうでも画期を見出していただいて、基本的にはすり合わせていきたいと思っています。いずれにしろ、横位連携弧線文土器が出現してきた以降、3つに分かれるんだというところで、おおざっぱなすり合わせをして、それぞれを12c・13a・13bと呼んでいけば、今後の集落論分析の中でも、同じスケールで話ができるんだろうなというところですよ。

小林：

それでは続きまして、黒尾さんのほうからですね、答えてもらいたいと思うんですけども、その12c、13a、13bとの対比について、それから画期としてどうなのか。その点、大内さんも確か、この12a・bまでに、リダクションされた曾利系が伴っていて、それが一つの大きな特徴として、画期の一つとなっているっていうようなご発言だったと思うんですけども。まずは西関東では、そういった画期と考えられる点があるのかどうか、というところを含めて、黒尾さんお願いします。

黒尾：

そうですね、画期をどこに見出すかということなんですけど、1995年の段階で作成した「新地平編年」は、「環状集落」の景観変遷を考えるための時間軸設定として用意したものです。そうした時間軸設定の作業は、

その前からやっていました。実はその吉井城山の段階、12c期以降というのは、よく「環状集落」の解体として説明されてきたように、検討する住居が「環状集落跡」の中にない、という段階でした。私の調査資料である宇津木台D地区、原山遺跡もそうでした。集落研究においては大きな画期をなす時期といえますね。ですから「環状集落跡」そのものを相手にするならば、加曽利E3式（12期）まで時間軸整備をしておけばいいという考えで、私はいたのですが、称名寺式の段階も含めて、ある程度時間軸を設定しておかないと、向後のためによくはないという意見が中山さんと小林さんのお話し合いの中で出てきて、そのときに、12c期以降の時間軸設定に参考にしたというか勉強させてもらったのは、当然加納さんの論文であり、あるいは石井寛さんの論文でした。ですから私に誤読がなければ、そんなに大きな矛盾はでないフレームとなっているはずです。ですから、今回、そういう意味で、加納さんのほうから中身について具体的に提案があって、12c期以降の対比ができる要件が整ったことをうれしく思います。加納さんのご発表でも、東京都羽村市羽ケ田上遺跡の土器、これは『羽村市史資料編』の中に入れたものなんですけど紹介していただきました。ほかにも国立市緑川東遺跡やあきる野市前原遺跡など、その後自分たちが調査報告をしたり、市史編纂の機会でも再検討をしたりすることで、12c期以降の土器群、加納さんのいう加曽利EⅢ式以降の土器群についても南武蔵でも検討できる事例が増えてきています。今後も検討を重ねていきたいと思えます。羽村市羽ケ田上の事例は、13a期のものとして『市史資料編』編年表に提示したのですが、今日のお話を聞いて、やっぱりもう一段階あげたほうがいいのかと思いました。編年表は大綱さんと私で作ったものなんですけど、大綱さんは12c期のほうが良いと提案していました。それを私が一つ下げたというわけです。多摩地域は充填文系の土器が少ない地域なので、なかなか難しいところがありますが、それでも、東西関東の12c期以降の土器群の併行関係を再検討していく機運を高めるいい機会をいただいたかなと思っています。ですから、これから少しそういう意味で、相互に連絡して調整するっていうんですかね、どこが間違っているのか、あるいはこれはいけるのか、そんなことを調整していきたいなと思っています。

小林：

はい、具体的に意味ありげな感じで、大変わかりやすくて。

そしたらじゃあいいですか、最終末の、終末段階っていうんですか、そこを具体的に話をしていきたいと思えます。ちょっと小澤さんにですね、いくつか質問来ているんですけども、これはちょっと小澤さん、または稲村さん最後だったんで、質問書く時間がたぶんなかったんで、稲村さんどちらかからお答えいただければと思います。大きく2つあって、一つは加曽利EⅣ・EⅤの分類は層位的な根拠があるのでしょうかっていうものが来ています。これ、まずちょっと。

小澤：

加曽利EⅣとEⅤの、EⅣというのが、ローマ数字なのかアラビア数字なのかというところがあるんですが、例えばそれが層位的な根拠としてはそんなに多くはないんですが、1個あるとすれば、名前忘れてしまったんですけど、13aの住居の上に14aの住居が作られたっていうのが、国立市の南養寺遺跡の、何号住だか忘れたんですけど（13a期：国立市南養寺遺跡97号住居址（国立市遺跡調査団1995『南養寺遺跡—Ⅹ—』、14a期：国立市南養寺遺跡26号住居址（国立市遺跡調査団1989『南養寺遺跡—Ⅵ—』）、けっこう特徴的な住居で、柄鏡形敷石住居のわりに、柄鏡の部分が四角いっていう、国立の郷土館に屋外展示して

あるものなんですけど、それはですね、下の住居は13aで対向U字文なんですけど、上っていうのはおそらく「加曽利E V」、伴っているのは称名寺の第1段階になりますので、「加曽利E V」が加曽利E IVの住居の上に、敷石を伴って確実に上にあると。そういったものは、千葉県ではちょっと今まだ見つけられていないというところで。だから、13bと13aってなるとちょっと私はいんまり知らないという。

小林：

はい、ありがとうございました。じゃあもう一つちょっと、また話が変わるんですけども、縄文中期と後期の違いはなんですか。土器の変化と理解していいなら、中期の土器と後期の土器が入り混じってくるとなると、何をもちいて後期と考えるべきなのか、と。たぶん同じ意図だと思っんですけども、別の方から、中期と後期の境界を土器だけで分けるのは無理ではないか。寺野東のSX01、水場の遺構ですね、などの低地の利用、蓋型土製品、貝輪状土製品、耳飾、注口土器等が増加し始めたときから後期になるのではないですか、というご質問。この辺り、お二方からお願いしたいんですけども。中期と後期の違いがどの辺か、という。

小澤：

中期と後期の分け方としましては基本的には帯縄文が出てくるいわゆる称名寺式土器の成立をもちいて後期とする、というところで。私のほうでちょこっと書かせていただいたんですが、その次の話にもなるんですが、基本的には土器で分けていくということが実態でして、なおかつですね、山内先生が何をしたかと言いますと、基本的にはとりあえず顔つきの違い、出土層位の違いとかで型式をやっていって、その型式を、細別型式を作っていくと、とにかく乱立すると。10にも20にもなると。そうなったときに便宜として数型式をまとめる。で、その型式数は常に一定であるということですので、『MUSEUM』（山内清男1969→1974「縄文草創期の諸問題」『MUSEUM』第224号 →『日本考古学選集21山内清男集』、築地書館）の編年にあつたとおりですね、これは小林さんの炭素年代測定結果で、早期が長くて前期がちょっと長くて、中期と後期がだいたい1000年ずつくらいあるなんていうようなのが、年代測定で初めてわかったんですけども、山内先生は、大塚達朗先生が指摘するとおり、型式っていうのは常に等価で離散的存在、つまり変化は常に一定の時間幅を持っている、でそれは全部同じっていうことを考えていたと思うので。基本的には、絶対年代、例えば平成の中期くらいって基本的にはたぶん平成10年から20年の間と計算すると思うんですけども、そういったものでもないし、文化が変わったから、とかっていうものでもなく、あくまで土器の型式が数型式をまとめていく中で引かれたラインということになりますので、別に称名寺が中期の、文化要素を見れば称名寺は多分に中期の文化要素をけっこう引きずっているとは思っんですけども、柄鏡形敷石住居、中期からあつてそのまま引きずってますので、引きずってはいるんですけども、土器の型式をまとめていく中で、便宜として、早期、前期、中期、後期、晩期、まあ草創期もありますが、そういう風に設定されている以上は、称名寺の成立をもちいて後期とする、という形になると思います。

小林：

あくまで機械的に分けるっていうことでよろしいですか。

小澤：

はい。

小林：

稲村さんもコメントどうでしょうか。

稲村：

先ほどのご質問でもあったように、文化の要素も含めて型式を分けていくといったような意味合いの話をしていて、そうすると中期後期の境目が加曽利Eだところになるけども大木だところになると、そういう形で、どこをとるかで違ってしまおうということがあると思うので、小澤さんの言うことでいいのではと思います。

小林：

はい、ありがとうございます。最後ちょっと、司会からですね、一つはE V式どうするかっていう問題と、中期末・後期初頭の区分をどこにするべきかっていうのを一応確認させていただければと思います。加曽利E V式、まあローマ数字のVを便宜的に使っているわけですけども、こちら、例えば石井寛さんが書かれている、称名寺式土器の論文（石井寛1992「称名寺式土器の分類と変遷」『調査研究集録』第9冊：65頁）の註で、あくまで便宜的に設定したんですけども、将来例えば算用数字に変えるのもやぶさかではないっていうような形で書いてあったと思います。もちろん記号ですから、どんな記号で書こうが、それがこういったことを指しているっていうのがわかればいいとも思うんですけども、このローマ数字のE Vですね、やっぱりその、ちょっと中途半端に設定されているところがよろしくないのかと思うのと、どこかではっきりと、今日稲村さんも初めて公言されるということだったんですけども、設定していったほうがいいんじゃないかっていう風に思うんですけども、その辺どうなんでしょうか。

稲村：

まあもちろん、お話の中でもあったように大別時期の問題があって、中期の中でもその辺であれば加曽利E IVである、というようなことが、大木10式末を中期末にすればその時期まで続くということもあるので、今僕らが言っているのは、もしかしたらE IV、称名寺段階のところで、E IV新なんていう名前をつけることもあり得るかもしれないというようなところですね。山内先生のE IV式っていうのが何を指しているのか全然わからないので、逆にまあここだと、便宜的なE Vという風に使う言い方でもそれは称名寺式に伴う加曽利E式が後期になっているということになるので、使い勝手としてはむしろ、いったん加曽利E系譜のものがなくなりまた称名寺式末に現れるという千葉的な要素を見ながら考えると、もしかしたら山内先生は、中津で後期を区切る考えだったかもしれないということもあり、当面便宜的に使うということでどうかというような気がしますがそれでもいかがでしょうか。

小林：

そういう意味で言いますと、あくまで今の便宜的な決定ですと、称名寺に伴うものがE Vっていう形になりますので、それは型式的な区分ではないと。今、後づけではあるんですけども、こういうところは違うよっていうことを整理されているところで、隆線上に縄文をどう転がすとか、そういった変化はあると思うんですが、これはしかし、型式区分するほどのものなのかどうか。その辺りちょっと、そういう意味で言うと先ほど、稲村さんがおっしゃったように、E IV式（E4式）が続いていると理解したほうがいいのではないかと。称名寺がE Vの根拠であるという気もするということくらいですね。

さらに、ちょっともう一つだけ重ねて聞かせてほしいんですけども、この称名寺式土器の設定についてなんですけれども、前、大塚達朗先生が、たしか安斎先生のシンポジウム（安斎正人編2013『関東甲信越地方における中期／後期—4.3ka イベントに関する考古学的現象③』（安斎正人科研）公開シンポジウム）のときに質問されていたんですけども、なぜ称名寺式っていうのは称名寺で、中津式でないのかって

いう質問があったんですね。それに対して千葉毅さんがお答えしたんですけども、それはすぐに在地化しているからだ。関東で在地化しているから関東の土器だっていうお答えだったというように私は記憶しています。まあそれはそれで私もわかるんですけども、そうだとすると、小澤さんが出している、予稿集の図でいうと97ページの「称名寺式土器の標式資料」ですね。これの、吉田先生が設定した称名寺貝塚の資料（吉田格1960「横浜市称名寺貝塚発掘調査報告」『東京都武蔵野郷土館調査報告書』武蔵野文化協会）ですが、この1番とか2番は比較的在地化する前の段階と理解できると思うんですね。もちろん胎土分析したらどうなのか、とかいろいろなことあると思いますけれども、基本的に型式学的には在地化する前ののだとしたら、これは称名寺式の標式資料じゃなくて、いま改めて中津I式の資料であるという風にするべきなのか、その辺りどのようにお考えでしょうか。

小澤：

研究史を踏まえて、これを在地の土器にしてっていうところがあるのと、あともう一個あるとすれば、中津式の、これはたぶん西日本の人も不満に思っているかもしれないのが、中津式が大きすぎる概念であるということがあると思います。つまりどの中津から来たんだと。これは加納さんの指摘もあるとおり、そもそも中期の土器が混ざっているんじゃないのかとか、馬場川0（中村友博1980「馬場川0式土器の型式学的位置」『歴史手帖』第78号、名著出版）とか、矢野K（湯浅利彦2003「4 矢野遺跡出土土器からみた中津式の成立」『矢野遺跡（Ⅱ）』徳島県埋蔵文化財センター）の問題とかっていうのも含まれて、要は中期と後期の境がよくわからない中で、なおかつ中津は瀬戸内のものなんですけれども、本来的に言えば、そういったものが、どんな中津が来ているのかっていうところがまずあるので、そういった中でそれはたぶん西日本ではうまく証明できないのかなという。だから、あくまで中津の影響を受けて、つまり中津の影響が強い、もっと言えばたぶん中津の人が来て作っているとは思うんですけども、中津が分離したものなのかなというところ。あともう一個、やっぱり松風台遺跡JT3（渡辺務1990『横浜市緑区松風台遺跡』日本窯業史研究所報告第38冊）というところで中段連結2段J字文（石井寛1992「称名寺式土器の分類と変遷」『調査研究集録』第9冊 横浜市埋蔵文化財センター）が出てきていて、これは今村先生（今村啓爾1977「称名寺式土器の研究（上）・（下）」『考古学雑誌』63-1、2 日本考古学会）もやっているんですが、要は称名寺I式b類っていうものは、すでに在地化しているというところもありますので、まあ2つの理由から、この1番っていうのはそもそも中津の何かっていうところの課題を抱えているということと、中段連結2段J字文がもう出てきてしまうというところから考えて、称名寺式の第1段階として捉えていいのかなと思います。中津の系譜の問題とかそういったところ、地域差の問題とかもあるのかなと思っています。

小林：

わかりました。内容的には、改めて整理していく。中津式のほうも問題があるということで、単純に同一視してはいけないよということで、了解しました。

じゃあ最後、もう時間が来てしまったんですが、ここをどうしても聞きたいので、中期と後期の境ですね。時期的な境はどこかということで、今日は稲村さんのお話を伺っていますと、称名寺併行といえますか、E V式土器がけっこう系統的に残っていて、そのあとになって堀之内も出てくる。まあ拡大解釈すれば、もしも山内の加曽利Eが中期で堀之内が後期だっていう、最初言っていたことを遵守すると、今、後期初頭にしている称名寺7段階がほぼすべてが中期になるという理解っていう風になる。または私として

は、小澤さんにも紹介してもらいましたが、3段階くらいまでが中期。西関東では、武蔵ですけれども加曽利E的な土器が確実に残っていて、それが展開しているの、そこに西から土器が来たということですから、加曽利Eが元気ががんばっている間は中期だろうという風に私は考えているってことです。それに対して、小澤さんのほうから、地域をそろえられないと。今の型式区分が各地で進んでいる段階で、齟齬があつてずれているわけですよね。それは当然そうだと思うんです。同じ土器を作っていたわけではないので、地域によって広域に区切るほどじゃないと。ですから、そもそも境をそろえることはできないよっていうお話だと思います。そうしますと、時期は地域ごとにやっていくのか。関東はこれを中期、東北はこれを後期って言うよ、という風に、地域ごとに時期設定しろっていうことなのかっていう。これはかなり大きな問題だと思うんですけれども、ちょっとその辺のお考えを、お二人に聞きたいと思います。

稲村：

私の予稿集の118ページを見ていただければと思うんですけれども、仙台以北ですけれども、大木が門前に続いていくというものです。これを見ると、大木10の、上から4行目にあたるのが、山内先生の仙台湾のほうでの資料にあたるというところなんですけれども、大木10でいうところになるよっていったようなところですね。それをF列、一番右側の列の、これは仙台湾以北ですから宮城の北のほうから岩手にかけての土器を集めてみると。総覧縄文土器の門前の中で使った土器なんかはちょっと入れてみましたけれども、こう見ると、大木から門前っていうのは全然区切れないなって、似たような土器がズルズルズルズルいっちゃうというような。土器を区切るって全然できない、しなくてもいいのかっていう風に思うわけですよね。さっき、関東でも地域が移っていっちゃいますけれども、加曽利E IVからE V、そして綱取I式、そして綱取II式の土器、もしくは堀之内の文様なんかを見ても、ちょっとこれは続いていて、地域をずらしながら進んでいってしまうということが。土器をどこで区切るかっていうのが必ずしも言えない、明確には言えないと。小林さんが言っておられた、地域ごとにむしろ見たほうがわかりやすいという言い方ができる。逆にもう一個、今別の言い方で、千年紀とか二千年紀とか、そういうような千年区切りに分けたものなんですけれども、そういったものを小林さんのほうで設定していただいて、それでその年紀にあたるよっていうほうがむしろ基準になってわかりやすいのかなっていうようなことは思います。

小林：

年代測定はまだそこまでの精度はないといえますか、千年紀、二千年紀は言えるけれども、その土器が、特に境の土器を何年前ということ全国的に区切るのは現状では難しい（註2）、それはやっぱり土器型式上の編年で抑えたほうがいいかなと思いますけれども、非常に興味深いご指摘です。地域ごとに時期設定をしていくことも、もちろん地域ごとの土器編年をしていかなきゃいけないので、最初からそろえてやるってこともないのかなと思うので、まずは地域ごとにやって、稲村さんがおっしゃったように、変化をたどっていくってのがまず大事だと思いますけれども、それで言ったら土器は全部続いているんじゃないかと。山内先生が言った、どこまで文様帯系統論をとるか、ですね。続いているのがそこらじゅうにあつて、型式間で切れるっていうのは基本的にはあまりないですよね。そうやって見たらどうかなってちょっと思いますけれども。

ただ、ごめんなさい、時間が来てしまったみたい。もっとここは議論を重ねたいところだったんですけども、また別の機会に、宿題とさせていただければと思います。特に何か言い残したこととか、ありますでしょうか。

大村：

「加曾利E V」の問題なんですけれど、稲村さんの予稿集117ページの図を見ますと、称名寺第1段階から第7段階までずっと「E V」が続いているんですね。小林さんの年代測定によれば、これ250年くらい続くわけで、加曾利E4式が50年くらいですから、「E V」が長すぎて、不均等じゃないかなと思います。それから私、縄紋中期中葉の土器をずっと、馬鹿の一つ覚えでやってるわけなんですけれども、型式細別の指標について慎重に定義してきました。例えば阿玉台式にしても勝坂式にしても、その成立段階について、基準となった資料を起点にして、上にずっと遡っていったわけです。勝坂式で見ると、この「図譜」75（『日本先史土器図譜』の写真を示す）ですね、キャタピラー紋の下に波状沈線が入っている。これを基準にして、隆線脇にキャタピラー紋とクサビ状連続押圧紋がつけられた古い階段、そしてそれをさらに上っていくと、角押紋が付けられる階段にたどり着きます。ここではそれ以前の五領ヶ台式後半にあった縄紋がなくなります。そこで私たちはこの階段を以って勝坂式の成立という形で決めました。阿玉台式の場合には、西村正衛先生は阿玉台I b式とされた宮平貝塚出土の土器等を基準にして「阿玉台式」の定義をされています。私はこれに学んで、五領ヶ台式終末期の、口辺につけられたY字文の末端が曲がって区画文を作る。あるいは「橋梁」把手がX字状文に変化して、区画文を作る。そして地紋に五領ヶ台式後半に施された縄紋がなくなった段階をもって、阿玉台式が成立としたという、明確な指標を見出しています。そういった観点でいうと、「加曾利E V式」っていうのは加曾利E4式とほとんど形式的な区別がつかない。当該期の研究者はいろんな細かいことを指摘されていますけれども、例えば逆U字文の頂部が口縁にくっつくとか、微隆線のわきに縄紋が乗るとかですね。たしかに実態はそうかもしれませんけれども、加曾利E4式との区別が明確につくとは思われない。少なくとも「E V」の「古段階」まではですね。称名寺式でいうと「第3段階」くらいですか。「4段階」くらいになりますと、対向するU字文が、くっついて、X状文になったり、U字文が縦列して、瓢箪状になったり、というように意匠が劇的に変わっていくので、この辺が一つの大きな画期なのかなと私は素人判断しています。その辺も、もう少し理論的な画期ってものをはっきりさせたほうがよろしいんじゃないかと思いました。

小林：

私も同じように思っていました。すみません、私がまとめる時間が全くない。こうなることはわかっていたんですけれども、中途半端なままですね、もう早く終わらせようということで。いえ、私が悪いんです。会場の皆さんからも私石投げられるかもしれませんけれども。それはお詫び申し上げまして、これで終わりにしたいと思います。どうも長い間ありがとうございました。

註1 大村発言における8行分削除の理由について（記 大村）

『日本先史土器図譜』81-1・2および83の土器に施された地紋について、黒尾和久氏が「撚糸文」と言及されたことに対し、大村は種々異論を唱えたのであったが、その折、山内博士著『日本先史土器の縄紋』（先史考古学会 1979年）の44頁の一部を、自己の主張を説明する一環としてスライドに転載した（下記に抽出）。

「3 斜位 [35]。縄を斜に置いて、条が縦の方向に続く様に、押捺する位置を移しつつ作ったもので

ある。RL（パソコンで記載しているため原典通りの記載になっていない。現在一般に行われている表記に従っている。

以下同様）の縄を斜位（右上から左下）にしたもの [35-1] が多く見られ、LRの縄を斜位（左上から右下）にしたものは稀である。共に条は縦に走る如くに見え、一般の斜行縄紋と違って見えるが、実は一寸した操作をして居る

からである（山内清男「日本遠古之文化 七」ドルメン 第2巻第2号 50頁中段16～22行 昭和8年）。時には撚糸の列と似て見えるが、節の傾き具合が著しくない。斜行する縄紋と同じ様に、条と直角に近い角度を示して居る。）

（傍点は大村）

この文章に言及した時、軽率にも私は〈『右上から左下』の回転の記載は間違いで、『左上から右下』に回転とするのが正しいのではないかと指摘した。同時に、最近刊行された『縄文原体資料 山内清男 コレクションⅠ』（高野紗奈江氏執筆 奈良文化財研究所刊行 2024年）において、公刊された『日本先史土器の縄紋』の「模形（ママ）写真」と、京都大学文学研究科図書館に保管されている「学位請求論文」の「附 模型写真」との間にいくつもの齟齬や誤りがあることが指摘されている（27～28頁）、との事実にも言及した。そして「上記の解説文もそうした一連の誤りの一角ではないか」と主張してしまった次第である。私の手元には、塚田光氏による『日本先史土器の縄紋』の「訂正原本」があり、これを入れた箱には渡辺兼庸氏や小山勲氏の筆跡と推定される訂正メモ（紙片）も収められてある。それで、刊行本には誤りが多々存在する（執筆者の校正を経ていないため）ことを想定していたことが軽率な判断を誘発したのであった。

ところが、シンポジウム終了後、念のために『日本先史土器の縄紋』及び『縄文原体資料 山内清男 コレクションⅠ』所載の施紋実験写真を再度照合したところ、「RLを斜位（右上から左下）にしたもの」という山内博士の記載は、〈RLの縄を右上から左下に斜位に回転した〉という意味ではなく、縄そのものの傾斜の意味（縄を粘土板上に、右を上にして左を下にして斜めに置く）という意味である、ということが分かった。

軽率な読み取りを行ない、シンポジウムの席上で誤った発言をしてしまったことは、痛恨の極みである。ここに当日のこの部分の発言を撤回し、故山内清男博士ならびに学位論文を編集・校訂をされた故塚田光先生をはじめとする編集関係者の皆さま、そして夕刻まで残って討論をお聴き頂いた聴衆の皆さま、パネリストの皆さまには、深くお詫びする次第であります。

註2（記 小林）

測定例が十分に多く、かつ遺構一括例や層位的な事例などが十分に多ければ、年代値によって地域毎の型式組列の同時性をみていく、すなわち交差年代の一例となることはあり得る。具体的には、関東・南東北・北陸・近畿の前期末から中期初頭の年代対比や、関東と東北の中期末～後期初頭の年代対比について検討したことがある。

小林謙一2004『縄紋社会研究の新視点－炭素14年代測定の利用』六一書房：第2章1節

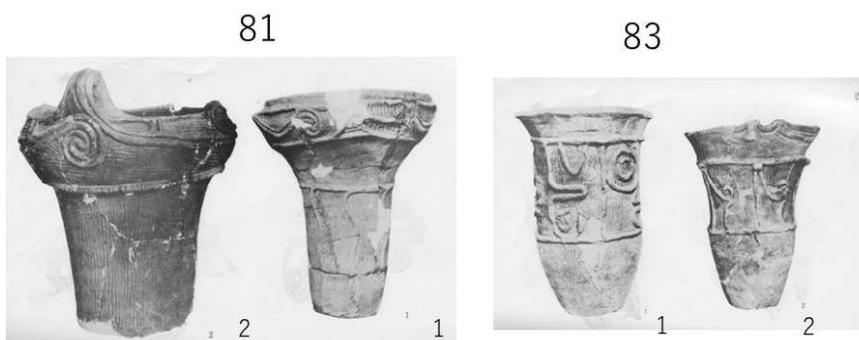
小林謙一2005「付着炭化物のAMS炭素14年代測定による円筒土器の年代研究」『特別史跡三内丸山遺跡年報-8-平成16年度』青森県教育委員会、81-91頁

「図譜」81—1・2、83—1は
果たして「撚糸紋」なのか？

—シンポジウム第2日目 討論資料（大村発言関係）—

1

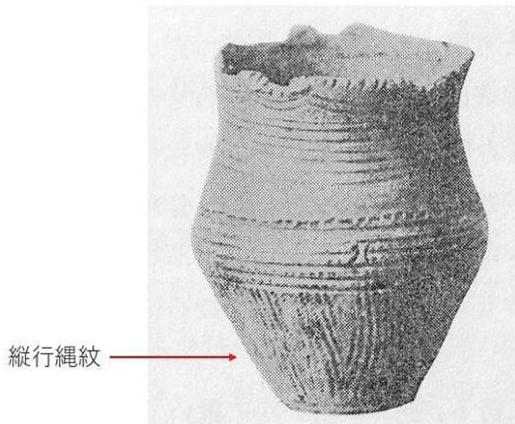
図譜81—1、2と83—1、2の写真



2

大村提示スライド①

続縄紋土器における縦行縄紋の写真 （『ドルメン』2巻2号（1933年））



「繩を押捺したものであるが、特殊の操作を用ひて居るため圧痕に於ける條は斜行せず、回転の方向に沿うて居るように見える。」
（「日本遠古之文化」七」50頁）

3

山内清男はいつ撚糸紋の施文方法を知っていたのか？

「昭和6年偶然の機会から、回転押捺によって斜行縄紋を作り、軸に繩を巻絡したものが撚糸紋を作るということを知り・・・」（『日本先史土器の縄紋』6頁）

←山内は、斜行縄紋と撚糸紋の違いを1931（昭和6年）には解明していた！

4

加曽利貝塚 総括報告書	藤坂・阿玉合米 加曽利I期編	E I				E II				E III		E IV	
ローマ数字 岡本 佐抄 1963(42)		E I				E II				E III	E IV	E V (石井 1992)	
アラビア数字 (山内 1969)		E1		E2		E3				E4			
神奈川編年 (岡本 佐抄 1980)		I	II a	II b	II c	III				IV			
東京・埼玉編年 鎌倉子 佐抄 1980		I	II	III	IV		V				VI	VII	
埼玉編年 (若津 佐抄 1982)		IX a	IX b	X	XI	XII a		XII b	X III	X IV			
新地平編年 (黒岡 佐抄 1995)	9c	10a	10c	11a	11b	11c1	11c2	12a	12b	12c	13a	13b	14a

令和6年度企画展「あれもEこれもE 加曽利E式土器」加曽利貝塚博物館 2024 改変

小林提示スライド